分散会６

司会者　　中山　佑司
記録者　　幸島　恭輔
会場責任者　武岡　伸司

NPO おのみち寺子屋

第 17 回人間力育成塾

吉川　千砂子　さん
延岡　明日美　さん

小学４年生から６年生までの 100 名が４泊５日をかけて尾道市内 100ｋｍを歩き抜く事業をメインに活動している。１日ごとのテーマを設定して、尾道の自然や街並みを体全体で感じながら 100ｋｍの道のりを楽しんで歩き抜く。この事業には、中学生、高校生、大学生、社会人といったたくさんの人たちが関わっている。中学生は働くことの大切さを知るキャリア教育の機会として、高校生や大学生は事業への想いを実現する機会としている。研修を重ねる中でスタッフも、参加する子ども以上にそれぞれの立場で主体性や実行力を身に付けている。この事業を通して、スタッフは苦しさや悔しさ、その先にある喜びや達成感を感じている。

新居浜市立北中学校

防災士養成講座から校区防災訓練奉仕へ

山内 結衣さん　合田 柚葵さん
立花 日和さん　伊東つづみさん

公民館での防災体験をきっかけに、防災について関心をもち、様々な活動に参加している。昨年度は危険箇所地図（防災マップ）作成、炊き出し訓練、クロスロードゲームを行った。今年度もジュニア防災養成講座に参加した。今回は企画から参加し、何をしたらよいかを提案した。研修を重ねてＡＥＤ講習をしたり、新聞紙スリッパ作成講習を行ったりした。また、炊き出し訓練では、どんなものが作れるかを調べて、当日はリーダーとなり、試食会を実施した。９月には、新居浜校区防災訓練でも小学生や地域の方々に活動を提供した。自分の得意なことで人を助けることができることを知り、いろいろな体験を通して防災の知識を高めることができた。

松野町教育委員会地域おこし協力隊

俳句を切り口にした地域交流の実践

川嶋　健佑氏

文部科学省の制度を活用した松野町地域おこし協力隊として俳句文学を担当して活動している。小学生に俳句の授業をしたり、松野町について発信したりしている。小学校で授業をするときには、芝不器男という有名な地元の俳人とその俳句の話をしている。俳句の良し悪しではなく、自分たちの句を自分たちの視点で見て話し合うことで、主体的で対話的な学びを目指している。また、地域の方にも入口句会を開くことで、地域の身近な文化や地域の魅力を知ってもらい、俳句を通して地域、友人、親子の交流を深めている。

＜質疑応答＞

＜ＮＰＯおのみち寺子屋＞

Ｑ　どのくらいのペースで歩くのか。

Ａ　６時に出発して 15 時まで歩く。１時間ごとに 15 分ずつ休憩をとる。

Ｑ　募集対象はどうしているのか。

Ａ　尾道全域にチラシを配布している。噂を聞いた県外からの参加もある。事前の研修など五つの事業に参加できることを条件にしている。

Ｑ　体育館はどこの体育館を使うのか。

Ａ　宿泊地は小学校の体育館を使用する。体の熱を冷ますためにプールをも借りる。小学校に理解をいただき、協力を得ている。

Ｑ　スタッフの役割決めはどうしているのか。

Ａ　研修プログラムの中で希望、取組み姿勢、能力・資質によって決定される。

Ｑ　進学就職のときにこの活動に関わり続けるための進路を考えるか。

Ａ　このまま関わり続けたいというスタッフもいる。

Ｑ　参加料は集めているのか。

Ａ　参加小学生から参加料を集めている。保険も掛けている。

Ｑ　一番うれしかったことは何か。

Ａ　辛いことも共に乗り越えて、一生の仲間と出会えた。

○　持続可能な活動を企画して、続けられているのが素晴らしい。次世代に受け継がれているところがすばらしい。

○　忍耐力を養う機会が学校の中では少なくなってきている。その中で、地域の力で事業を続けられるのがすばらしい。

＜新居浜市立北中学校＞

Ｑ　活動を通して身に付いたことは何か。

Ａ　地域の人や子どもと関わることで気付く力が身についた。周りに目を向けることが大切なことに気付いた。自分に何ができるか分からなかったが、自分の得意なことで周りの役に立てることが分かった。

Ｑ　防災への意識はいつ頃から高まったのか。

Ａ　５年生のときに、自分たちが防災のリーダーになるという言葉を聞いて、防災への意識が高まった。今回の事業を通して、さらに防災意識を高めることができた。

Ｑ　５年生で防災キャンプに参加して、体育館で１泊２日の体験をした。その場で初めて会った人とグループになって助け合う経験を通して、これからなにかあったときに、なにかできたらいいなと思った。

Ａ　消防士の父の話を聞いたり、東日本大震災のことを知ったりする中で、家庭で災害に向けての準備をした。自分にできることをもっと考えていきたいと思った。

Ｑ　防災クッキングはどのくらいの準備をしているのか。

Ａ　ジュニア防災養成講座ではカセットコンロを準備して使用した。防災訓練では、作る食事が 300 人分と多かったので、鍋でコンロを使って調理した。電気がなくても料理が作れるというのを知

ってもらいたいと思っている。
○　主体的に活動を続けていく姿がすばらしい。
○　防災について学ぶのも大切だし、地域を巻きこんで実践するのがすばらしい。

＜松野町教育委員会地域おこし協力隊＞

Q　小学生に俳句を教えるときに、どのような視点でよい俳句を決めさせるのか。
A　句の面白さの理由を分析していくように言葉をかけていく。小学生の方が深く読んでいたりして教えられることが多い。
Q　松野町に来て、地域の方とのコミュニケーションはうまくとれたのか。
A　松野町は伊予と土佐の境目で人の移動が激しい場所で、外部の人を受け入れる素地がある地域で、受け入れてもらうことができた。
Q　地域おこし制度で溶け込めない人はいないのか
A　松野町の場合は溶け込めずうまくいかないという事例は聞いていない。３年間この制度で働いた後はそこに住むということが前提になっている。
○　自分の町の偉人を通して町のよさをＰＲするのがよい。
○　俳句の作り方が分からない人に対する前向きな言葉かけがよい。

＜参加者からの意見・感想＞

○　いろいろなジャンルの話を聞くことができた。今日学んだことを将来に生かしていきたい。
○　知らないことがたくさんあって勉強になった。
○　地域のことを伝える活動がたくさんあることを知り、勉強になった。
○　形はちがうけど、地域のためにがんばっていることをたくさん知ることができてよかった。
○　地域の中で子どもを育てるために、地域の特色や文化などの強みを生かしていて、地域ごとの色があってよかった。

分散会７

司会者　　上田　昇
記録者　　今永　晴香
会場責任者　山口　定伸

NPO おのみち寺子屋

学習支援

市内３か所の公民館等で、冬休みと春休みに児童生徒が宿題などを行う場（＝学びの機会）を創り、学生ボランティアが指導している。最終日には、全員で 10 メートルの巻きずし作り（＝体験の機会）に挑戦している。巻きずし作りの後には、学生ボランティアを対象として、郷土の著名人に成功体験を語っていただく（＝仕合わせ体験）を開催している。

左：杉原　青葉さん
右：伊原　大樹さん

「できないことは恥ずかしいことではなく、やらないことが恥ずかしいこと」をモットーに、子どもたちにチャレンジすることの大切さを伝え、これからのグローバル社会で生きていくための力を育み、そして、愛する郷土を次世代に引き継ぐために、子どもたちの心に灯をともしている。

また地域の学生ボランティアの力を借りて、Win-Win の関係を作りながら、元気あふれるたのもしい、たくましい人材を育んでいる。

NPO 法人ライフサポートアゴラ

制服循環プロジェクト

卒業した子どもの学生服を寄付していただき、補修・洗濯を高齢者団体が、クリーニングを障がい者支援施設の方々が、販売をアゴラ（シングル世帯）が行っている（各作業賃金支払い）。収益は、販売管理費を差し引き、残りを協力いただいた各団体（下記）へ寄付している。

相原　輝久　氏

愛媛県内では、各学校で在校生に対する中古学生服の販売をバザー等で行っているが、新入学世帯への販売は行っていないため、以前から安く制服を購入できる仕組みを作ってほしいと声が上がっていた。

学校ＰＴＡに対しては、子どもたちの安心・安全のための物品購入やイベント実施のための寄付を行う。子ども食堂・県内子育てＮＰＯに対しては貧困層対象のサービスであるため運営資金獲得が難しく、運営補助のための寄付を行う。各団体の継続・拡大を促進するため、団体への寄付を目的に活動している。

八幡濱港拓実行委員会

八幡濱港拓による子どもガイドの育成事業

八幡濱港拓実行委員会は、2015 年度に発足した。愛媛県八幡浜市の宝である「松村正恒氏」設計の建築群をはじめ、歴史を感じることができる「まち・建築」を拓いて、地域の子どもたちが来場者へガイドを行っている。活動の目的は①八幡浜市全域の素晴らしい景

眞田井　良子　氏

観や建物などを再確認していただき、地域への誇りと愛着を育むこと②子どもたちが主体的に関わることにより、八幡浜の未来を切り拓く人材を育成することの 2 つである。
　今年度で第 10 回を迎え、ガイドをしてくれた子どもたちは延べ 200 名を超えた。今度も継続して行うことにより、参加者皆様の地域への誇りと愛着を育んでいきたい。

＜質疑応答＞

＜ＮＰＯおのみち寺子屋　学習支援＞

Ｑ　まきずし以外に活動はあるのか。
Ａ　今はない。
Ｑ　なぜ夏休みにしないのか。その方が参加者が増えそう。
Ａ　夏に子どもたちと 100ｋｍ歩く活動がメインなので、学習支援はしていない。
Ｑ　子どもたちの輝いていた場面はあったか。
Ａ　いつも退屈そうにしていた中学生に渡した本にとても興味をもってもらい、うれしかった。
Ｑ　どんな教材を提供しているのか。
Ａ　今は本屋で買っている教材を使っているが、これから尾道の郷土資料などをつかって自作資料を作っていこうと思っている。
○　小松では未来塾をしている。小松高校ライフデザイン科と子どもたちとでピザづくりをしており、おやじ連合とともに活動しているのだが、尾道でも高校生とも連携してみるのもいいのではないか。おやじを巻き込んでも面白いと思う。
○　地域の得意なことをもっている方に学校でしてもらった経験がある。学生と地域の連携でいろんなＮＰＯとつながって企画のアイデアをいただいてみるのはどうか。
○　各学校ではなくて、教育委員会のお墨付きをもらえばもっと拡散できそう。
→　教育委員会に以前は認めてもらえなかったが、冬休みの企画は教育委員会の後援をいただけた。
○　教育的な効果がどのようにあるかを文面で表すのが大切。大学の先生も巻き込んで、教育的効果をまとめた啓発資料を作るとよい。
○　学校によって入りやすいところと入りにくいところがある。学校と違うこと（体験活動）を伝えたり、子どもたちが面白いなと思ってもらえる活動を伝えたりするとよい。
○　いろいろな行政機関とうまく付き合うのも大事。協力を図っていくとよい。
○　負担と感じているとあったが、それは負担ではなくて日々の活動を頑張っている証拠だと思う。前向きに取り組んでいくとよい。また、進歩のない活動と課題にあったが、メンバーもどんどん変わるし、引き継がれていることは守りつつ、そのときの色を出して活動することが大切なのだと思う。
○　子どもたちにとって自分たちに近い年齢の人と関われるのは魅力だ。自作教材がとてもいいと思うので、地域の食を取り入れたり、地域の尊敬できる大人と取り組めたりするとよりよい。

＜制服循環プロジェクト＞

Ｑ　全国に広めてほしい活動してほしい。本業は？
Ａ　海外で貿易をしながらＮＰＯを本業にしつつある。みんなが助かるとわくわくするという思いでやっている。

Q　制服が今残っているのをどうしたらいいのか。
A　直接連絡して取りに来てもらうかコープさんに持って行ってもらうとよい。
Q　平日にどうやって学習支援をするか。
A　活動できる人のメンバーをまず増やすことが大切。ボランティア団体がないか調べたり、公民館と連携したりしている。また、教育に興味があるけど場所がないという方と連携できる仕組みを作っている。
Q　大学生はどのように集まってきたのか。
A　愛媛大学にボランティアできるところはないか相談した。
Q　行政とうまく連携されていてすばらしい活動だった。今治でも活動可能か。
A　２月に今治でも活動を宣伝する予定。
○　いろいろな人に援助が届いていく仕組みを広めていきたい。
○　自分から楽しいと思えると子どもたちも意欲的になって自己肯定感も高まっていくと思う。
○　起業家教育のイベントをするときにはぜひ来てほしい。
○　すてきな取り組みで感服。教育と福祉の連携が今課題になっているので先駆的な取り組みだ。
○　実際にＯＢに声をかけて制服等を集めることがあった。このような仕組みがいろいろなところにあるといいと思った。
○子育てをしている母として、今受けているいろいろな支援の仕組みが分かった。ありがたい。
○世代のつながり、横のつながりもあって、社会教育として理想だと思った。

＜八幡濱港拓による子どもガイドの育成事業＞

Q　高校生とどのように関係作りをしているのか。
A　関わっているＮＰＯの団体代表が八幡浜高校の卒業生のため声を掛けやすい。高校生の得意なことを生かしてもらっている。工業高校が自転車を作ってくれたり、農業高校がミカンづくりに協力してもらったりしている。
Q　建築への興味を小学生にもってもらうためのアプローチ方法
A　日土小学校の建築で見えるから、実際に見ながら紹介している。
Q　子どもたちがうまくいかないことに直面した時に声掛けはどのようにしているのか。
A　やろうとしていることがうまくいかないときは、こうやってみたらどうかなどとアドバイスをしている。少しずつできることを増やしていけるようにしている。
Q　子どもたちに興味をもってもらうためのアプローチ方法
A　建築物から形を見付ける探検している。牛乳パックで好きな建築物を作る。こども・けんちく学校という活動もしている。
Q　これからやってみたいことは何か。
A　子どもの起業家支援。
Q　ガイドをしている対象年齢
A　小学生が主にガイドをしている。中高生も様々な角度から関わってくれている。
Q　レトロバスはどのように借りているのか。

Ａ　伊予鉄にお願いしている。代金は必要。
○　大学生が勉強しているようなことを小学生が学習しているのがうらやましい。子どもの時から身近にある貴重なものを勉強できるのがすばらしい。隠れている魅力がたくさんあるので、アピールしていくことが大切だと思った。
○　八幡浜の魅力を改めて知って、すぐに行きたくなった。
○　先駆性のある魅力的な取組だと思った。子どもたちがどんなキャリア形成をしていくのか楽しみ。新居浜でも同じような活動をしているから、サミットのようなものを開けたらさらに面白そう。
○　八幡浜もいいけれど、愛媛のために、建築家のグループで発展させてほしい。
→　建築家協会等とも連携していて、愛媛のためにも動いている。
○　保内の町並みがよかったなと思い出しながら話を聞いていた。東温市も魅力を発信していかないといけないと思った。

＜発表者より総括＞

○　アゴラの方の発表が特に印象的だった。ＮＰＯとの連携が一番の課題だと思ったので、上司と相談して変えていきたい。
○　自発的に活動されている学生の姿は素晴らしいと思った。自発的に活動できる子どもたちをこれからも育てていきたい。
○　地域貢献活動はみんなの努力で成り立っている。思いは必ず誰かが見ている。持続可能なＮＰＯ活動をつくれと言われている。そんな中、自分は日頃からこれとこれくっつけたら面白くなりそうと常に考えている。これからも連携して活動を続けていきたい。

分散会８

司会者　　清家　卓
記録者　　高田　容弘
会場責任者　西川　浩司

益田市教育委員会（ＮＰＯ法人カタリバ）

「学校教育と社会教育の往還」で未来の担い手を育てる！　ライフキャリア教育で、未来をつくる

檜垣　賢一　氏

益田市に移住し、人と繋がり、心のふるさとができたと感じている。しかし、益田の子どもたちは人との繋がりが薄れ、益田市には魅力的な大人がいないと半数が思い、益田にいる 18 年間でいろいろな人と繋がることができていない。

そこで益田の魅力を伝えるため、教育委員会としてこれまでの職業観に偏重したワークキャリア教育から、多様な幸福感を子どもたちに育んで欲しいという願いを込めた「ライフキャリア教育」の推進を始めた。この活動では子どもと大人が１対１で話をする。対話で大人と繋がり、繋がった大人と活動する「益田版カタリ場」である。地域の大人との繋がりの一歩目として市内のほぼすべての小中高等学校で行っており、昨年度は、延べ 1144 名（人口比率２．５％）が語り合った。

益田の中で生き生きと生活している大人が語るだけでなく、高校生が小学生に語っていくなどさらに幅を広げている。この活動には、地域人材の発掘・育成としての意味もあり、そこから出てきた大人のあれやりたいこれやりたいという思いを一緒に形作っている。

思い出キャンプ実行委員会

思い出キャンプ

宮﨑　恵　氏

思い出キャンプは、2013 年に公民館の協力のもと金田地区避難体験事業の一環として始まり、2017 年には実行委員会を立ち上げ、野外宿泊体験、調理自習など「お金をかけずに運営」を目標に思い出づくりに努めてきた。2019 年は新宮少年自然の家でドラム缶風呂や草木染め、キャンプファイヤーを行った。保護者をはじめ、愛護班や小学校、婦人会、地域の企業と連携・協働のおかげで、子どもも大人も心の成長とつながりを深め、楽しく学び合うことができる活動に発展してきた。

リピーター率も高く人気の思い出キャンプであるが、その楽しさの秘訣は、アンケートを取り、実行委員の「やりたい！」を大切にした、時代にあった活動であること。参加費がリーズナブルであること。そして、大人のつながりづくりの仕掛けがあり、その楽しさを発信していることにある。今後もつながりづくりを大切にし、個々のやりがいの向上のため、参加者みんなが主体的に活躍できる「みんなの思い出キャンプ」として続けていきたい。

南予交流食堂

南予交流食堂支援事業

南予地域では、少子高齢化、人口流出、関係の希薄化などにより地域の支え合い機能が年々と低

下している。しかし、昨年発生した７月豪雨災害の経験から地域の結びつき強化の必要性が再認識された。

三浦 絵里 氏

　このため、南予地方局では、「食」を通して地域の方々が交流する拠点となる『交流食堂』の普及を目指した支援を今年度から実施している。具体的には、「南予交流食堂立ち上げ応援セミナー」を開催し、県内先進団体の取組み紹介、フードバンク事業説明、意見・アイデア交換を行うことで、食堂の役割や意義の周知、ニーズの把握、開設に必要な運営ノウハウの蓄積、ネットーワークの構築を図った。

　さらに、「模擬交流食堂の開設」を行い、運営ノウハウの集約や課題を整理・情報提供するとともに、近隣住民や関係団体に疑似体験してもらうことで、具体的なイメージを広く共有することができるよう現在委託先を決定し進めている。このように民間発の取組みを後押しすることで、交流食堂が増え、地域の絆が深まり、住民自らが地域福祉の担い手として活躍する社会を目指している。

＜質疑応答＞

＜益田市教育委員会（ＮＰＯ法人カタリバ）＞

Ｑ　大人の理解が進まないとこの活動は進まなかったと思うが、生みの苦しみを教えてほしい。

Ａ　自分たちの思いが強すぎて途中で離れていった大人もいた。最初は子どもへの楽しさを作るために力を入れてきたが、今は子ども以上に大人がまた参加したいと思えるようにしている。そのために、話をした子どもから手紙が届くようにしたり、しっかり関わり「またね」と言い合えるような関係づくりをしたりしている。

Ｑ　参加者はどのように募るのか。

Ａ　中学校でのカタリ場では中学校区範囲の自転車で出会える大人に来てもらっている。公民館や若い年齢の近い人とも繋がって欲しいので企業との連携も大切にして参加してもらっている。市役所として新規採用職員は全員出るようにしている。

Ｑ　話が弾まないこともあると思うが、盛り上げるこつはあるのか。

Ａ　大人に対して事前の打ち合わせを２時間している。カタリ場の仕掛けとしては、１対１で話をするとき、まず、大人がこれまでの人生をグラフに表し、それをもとに語る。次に子どもが思いを語って、最後に１０分間フリートークというようにしている。このとき、本音で話すためには大人が本音で話さないといけない。そのため、１対１で話したことは誰にも言ってはいけないというようにしたり、他の人には聞かれず周りには聞こえない状況を作ったりしている。

Ｑ　テーマは人生についてなのか？

Ａ　一応これからどんな大人になっていきたいのかを考えるのが共通のテーマだが、１対１で話すときは別に進路のことだけではなくて、今自分自身が悩んでいることや、自分が好きなことなど何でもしゃべってよいとはしている。まずは、仲良くなってほしいと思っている。

Ｑ　ペアの組み合わせは？

Ａ　とても大事。学校としっかり打ち合わせて、マッチングしている。

Ｑ　いつ行っているのか。

Ａ　基本的に学校のカリキュラムの中で行っている。４年前に１つの高校で実験的に行い、市内の校長先生方に見ていただいた。そこから小・中学校にアンケートを取り、希望があった学校で行

っている。
Q　地元では地域がつながる行事はあるが、結局、職がなければ戻ってこないのではないか。
A　ライフキャリアという価値観を知ってもらうことが大切であると思っている。始めはどうしたら子どもに戻ってきてもらえるようにするかを考えていたが、今は心のふるさとをつくって欲しいと思っている。益田の子どもたちに世界に羽ばたく前に「ただいま」と言える環境を作りたい。そうすれば、自然と戻ってくるのではないか。
○　仕事が先か人が先なのか。魅力のある大人がいないとその街はすたれていく。大人が背中を見せていると若者も残るのではないか。今なら都会の仕事も地方でできる。地方の逆襲のときではないかと思っている。

＜思い出キャンプ＞

Q　発信ツールは、フェイスブック以外にもあるのか。
A　インスタグラム、ツイッター、地元のケーブルテレビでも発信している。
Q　どのように参加者を募集しているのか。
A　ほとんどがフェイスブック。30 分でいっぱいになることもあり、先着で制限をかけている。しかし、今回２校にチラシを配ったが 10 数名だったので増刷した。
Q　参加者は何度も参加しているのか。
A　何度も参加している。小学生のときに参加した子が中学生になってボランティアで参加している。
Q　宮﨑さんは、コミュニティスクールにも関わっており、人とのつながりを大切にして実現させていく力があるが、後継者をどう作っていこうと考えているか。
A　この思い出キャンプは誰にも渡さない。私の地域の方に、生涯現役でいて欲しい。もし、世代交代したときは、新しい世代と一緒に楽しんで欲しい。そうすれば、引き継ぎたい人が現れる。引き継ぎたかったら、君ならできるという人を見付けて欲しい。
　コミュニティスクールは、ノウハウをしっかり伝えて引き継いでいきたい。引き継ぐ人は見ていたら、この人ならという人が見つかる。
Q　補助金はどうやって得たのか。
A　地域振興課の「あったかまちづくり支援事業」という市の補助金に応募し選ばれた。市の補助金で趣旨にあったものに応募している。
○　子どもの頃、身の回りにこういう活動がなかった。自分が小学生のときにやってみたかった。
○　御五神島・無人島体験事業でも、子どもたちは無人島生活体験を通して仲間と協力して困難なことを克服する取組が行われている。
○　野村アドベンチャースクールが行われてきたが、後継者がなくスタッフの確保が難しく今年度幕を閉じることになった。１泊２日でもこれだけの企画はすごい。
○　長く続けることを考えると、シンプルな企画、人数で一人ひとりの充実度を高めている。持続可能にするためにはどうすればよいか考えている。
○　スタッフ確保という面で、愛媛大学との連携も考えられる。

＜南予交流食堂支援事業＞

Q　宇和島市は最近交流食堂がどんどん立ち上がっているが、今立ち上げたいと思ったときどこに言えばよいのか。南予地方局や各市町が開設しているのか。

Ａ　開設は民間で、南予地方局ではモデル事業として模擬食堂を開設し実績を作っていただいている。宇和島市は民間団体に補助金を出しているのでそれを利用したり、赤い羽根募金を利用して開設したりしている団体もある。また、補助金無しで開設している団体もある。さらには、大人にはお金を出してもらって運営している団体もある。補助金無しでも続けられるように横のつながりをもつことができるように支援している。

Ｑ　模擬交流食堂についてもう少し詳しく教えて欲しい。

Ａ　やってみないと分からない。やるためには資金がいる。計画書の段階から継続を目的として行っている。

Ｑ　具体的によい事例はないか。

Ａ　お寺で行い、おさがりを利用している。広いスペースがありみんなが集まるのに適している。

Ｑ　尾道でも、はらぺこレストランという子ども食堂を行っており、学校へ回覧板を回しているが、その中で学習支援を取り入れたいという意見が出ている。どう取り入れたらよいか。

Ａ　学校とは関係ない。子どもたちが宿題をもってきたら教える。勉強する場になると子どもたちが来なくなる。生活経験、文化体験を提供しているところもある。

Ｑ　子ども食堂でのアレルギー対応は。

Ａ　アレルギーの確認はしているが、厳密にはできていない。久米食堂はしているようだ。寄付してもらったものも賞味期限などは確認している。怖いのは思いつきでやって事故が起きたとき。そういった対応ができるように行政が支援できるといい。

○　子ども食堂を月１回やっているが、四国中央市からノウハウを学んだ。初めは教員でスタートして保育士ややりたいという人がたくさん出てきた。発起人は難しいがやりたい人は多い。今、中高生のボランティアが勉強も教えている。補助金は受けていないが募金などでお金は潤沢にある。

○　目的が子どもの貧困対策から地域の交流の場になっている。改めてつながりを大切にしている。

○　子ども食堂が自分の地域にあるとよかった。

分散会９

司会者　　岡崎　美季
記録者　　宇都宮健太
会場責任者　山中　健司

島根県益田市教育委員会（島根県）

明日の益田市を創る次世代を育てる！！

大畑　伸幸　氏

地方創生が叫ばれ、各市町村は総合戦略を策定し、「持続可能な地域づくり」を目指している。

益田市は、「持続可能な地域づくりのためには持続可能なひとづくりが必要である」と考え、「益田市ひとづくり協働構想」を策定した。この構想では、「未来の担い手」「産業の担い手」「地域づくりの担い手」を一体的に育成していこうと決め、全庁で、官民協働で進めている。

まさに、今の課題解決をミッションとする一般行政を未来への投資を担う教育行政が巻き込み、一体的に取り組んでいる。

南山崎小学校防災キャンプ実行委員

南山崎小学校区防災キャンププロジェクトを通して

佐藤　郁子　氏

今年度、南山崎小学校は、学校防災教育実践モデル地域研究事業の指定を受け、学校、家庭、地域、大学、行政、企業、ボランティア団体等と連携・協働して、防災教育に取り組んでいる。

特に 10 月５日～６日に実施した防災キャンプでは、愛媛大学等の協力を得て、防災・安全マップ作りに取り組んだ。他にもペットボトルピザ作り、８ブースによる防災スタンプラリー、クロスロード、段ボールハウス作り、地域の方による炊き出し訓練、簡単朝食、避難所におけるレクリエーション等を行った。

学校を中核として、子どもや保護者はもちろん、地域の防災力向上にこれからも取り組んでいきたい。

多田だんだんプロジェクト

「ひと」「もの」づくりプロジェクト

白武　和嘉子　氏

多田地区は西予市宇和町の最北部に位置し、人口 1400 人。肱川の流がる地域である。多田だんだんプロジェクトは多田地区にある地域づ

持続可能な地域を実現するために 17 の目標を掲げ、誰一人として取ている。４つの部会から組織され、複数の人が得意な分野を生かし、ら無理なく活動を行っている。

今年度は「ひとづくり」「ものづくり」をテーマに、助け合い、支え合う「地域の新しいかたち」を目指します。中学生、高校生と共に多田地区の未来を考える「中高生部会」を立ち上げ、米作り文化伝承事業に関わり、地域経済循環と地域雇用を目指し、サフランの栽培に挑戦している。

＜質疑応答＞

＜島根県益田市教育委員会＞

Q　きっかけや経緯について詳しく知りたい。

A　（平成 20 年度頃）益田市の現状に、「高校を卒業した子どもたちの約 30%しか益田市に帰ってこない、地域に魅力がない」等のアンケート結果があり、一度益田市を見直すことになった。それから、ふるさと教育、学力向上対策、益田オリジナルのキャリア教育等に力点を置いてきた。しかし、施策効果も充分に発揮されないことからそれぞれの取組をライフステージごとに体系立て、施策効果を最大限発揮させるため、平成 27 年度に「ひとづくり協働構想・ひとづくり計画」を策定し、取り組んできた。この計画を推進するためのプログラムは、益田の子どもたちとたくさんの「ひと」との出会いを軸としている。大人が総がかりで子どもたちに関わり、次世代を育成することが、この計画の最も重要な点になっている。今後、成長した子どもたちが、ロールモデルとして次世代との関わりをもつことで、人材育成の循環「ひとづくりの環（わ）」をつくることを目指している。また、ライフキャリア教育に重点を置き、2019 年のアンケート結果では、「一度は益田を離れても将来益田に住みたい中高生：71%」と一定の結果を挙げている。

詳細は https://masudanohito.jp/の HP を見てほしい。

Q　どのような「ひとづくり」をめざしているのか？

A　将来の益田市を支えるため、自ら可能性を広げることができる人。二つ目に、仕事を継続発展させる人。三つ目は、地域の人と協力し、地域を支える人、地域の資源を生かせる人。

Q　「ひとづくり」に大切なことは？

A　「対話」。「対話」ということが最も重要なキーワードになる。魅力ある地域づくりを進めるためには、地域総がかりの対話が必要になる。

Q　この計画のキーポイントは？

A　「世代を意図的につなげる」こと。結局、益田市を支えるのは今の子どもたち。この子どもたちの 10 年～30 年先、その先を見据え、市全体での取組が必要になる。そのために、「カタリバ」、「ライフキャリア教育」等を盛り込んだこの計画が重要になってくる。

＜南山崎小学校防災キャンプ実行委員会＞

Q　発表に付け加えることはあるか。

A　本校は、土砂災害を除いた災害時に、避難所兼緊急避難場所に指定されており、中心的な役割を果たすことが求められるため、「災害安全」について重点的に取り組むこととした。本日はその取組の中から、学校、家庭、地域が連携・協働して行った防災キャンプについての報告である。

「防災マップ作り」「ペットボトルビザ＆非常食」「防災スタンプラリー」「段ボールハウス作り」「クロスロード」を行い、避難所体験として体育館に宿泊した。防災スタンプラリーは、地域の方々、関係諸機関の協力を得て、８ブース設置した。

成果としては、専門家や専門機関との連携により、学校だけでは学ぶことのできない体験をしたり、知識や情報を得たりすることができ、保護者や地域、教職員の防災意識が高まった。また、参観日やキャンプを通して、学校から場所や時間を広げることで、地域を巻き込んだ防災教育を推進することができた。大人も子どももそれぞれの立場で防災や減災について考えるようになった等、数多くの成果が挙げられた。

Q　課題は？

A　課題は継続すること。「継続は力なり」、今後も繰り返し学んでいくことが大切である。保護者、地域の方々と思いを共有しながら、今後も防災について学ぶ機会を確保していきたい。「自助・共助・公助」の精神のもと、子ども一人一人が「生き抜く力」とともに「安全な社会をつくるための知恵と行動力」を身に付けさせることが重要である。「災害は忘れた頃にやってくる」と言われるが、起きてしまった災害や事故に対応するよりも、災害や事故に遭わない減災に努めることの方が大切である。そのために、教職員一人一人が、「子どもの命を預かっている」ことを常に念頭に置き、防災教育に繰り返し継続して取り組み、知識・技能・判断力・実行力の育成に努めることが、今後も必要不可欠であることを改めて強く感じている。

＜多田だんだんプロジェクト＞

Q　プロジェクトについて、もう少し詳しく教えてほしい。

A　多田地区は、大部分が肱川山地に囲まれ、山と農地が広がる地域である。新しい地域づくりの活動をスタートし、住民自らがよりよい地域を目指し、多くの人々が参加できる計画したいと考え、その組織名称を「多田だんだんプロジェクト」とした。これは、物事が段々よくなるという意味と、南予地区で昔から使われてきた「だんだん（ありごとう、感謝する」という意味を踏まえている。

　基本的コンセプトは、より多くの住民が参加できる機会の創造とコミュニケーションを向上させる手段を考えることである。４つの部会「安心安全部会」「環境部会」「文化教育部会」「開発部会」（私はここ）から成り立っている。開発部会は、「ものづくりプロジェクト」と「ひとづくりプロジェクト」を行っている。ものづくりプロジェクトでは、サフラン栽培・地酒ステップアップを主に行っている。この２つの活動から、新たな産業の創出・地域雇用・地域間のふれあい、生産意欲の高まり・関係人口の増加の可能性が期待できる。ひとづくりプロジェクトは、米作り伝承事業・高校生部創立を行っている。この２つの活動からは、普段食しているお米のありがたさを知ることや学生と地域の方が世代を超えて相談し合える、社会貢献への意識を高める、次世代の若者の興味関心につながる等の可能性が見えている。

　詳細・活動について https://ja-jp.facebook.com/tada.dandan/の Facebook をみてほしい。

Q　サフランとは？

A　アヤメ科の植物から採れる香辛料。フランス・スペイン料理に欠かせない独特な香りがある。多田で栽培しやすい植物であり、飲食店からの需要が増えている。 ビジネスチャンスがある。

Q　地酒づくり（ステップアップ）とは？

A　酒造復活を目指し、多田の人たちが米から作っている。海外では、空前の日本酒ブームであり、海外の日本酒コンクールでも賞をとることができた。この地酒造りには、たくさんの人が関わり、多くの絆をつくっている。ここにもビジネスチャンスがあるので、さらに発展させていきたい。

分散会 10

司会者　　田邊　裕貴
記録者　　稲田めぐみ
会場責任者　安倍　周作

南部町教育委員会

高校はないが、高校生はいる！
～復活！高校生サークル、復活！青年団～

大下 真史 氏

南部町は、少子化・人口減少という課題に直面しており、町内には高校がなく、中学を卒業すると町外の高校に進学してしまう。そのため、中学卒業までに培った同級生同士のつながりや地域との関わりが希薄になり、高校生の孤立化や高校卒業後の都市部への流出傾向がみられている。

そこで、南部町の未来のために必要なものとして、コミュニティ・スクールを基盤とした「高校生サークル With you 翼」を立ち上げ活動している。

高校生の出会い・体験・感動をテーマに、様々な活動を実施している。

【出会い】…小学生との出会い、他市町村の高校生との出会い、バスツアーや大学生や新青年団との出会い、地域の方との出会い、外国の方との出会い
【体験】　…自然体験、文化体験、製作・販売体験、町づくりに関わる体験、人前で話す体験
【感動】　…交流による感動、合唱による感動、学びによる感動、仲間と時間を共にすることによる感動

各活動を通して、高校生自身の生き方が豊かになり、高校生の姿が町を元気にし、新たな人づくりの循環が生まれつつある。

にいはま森のようちえん

にいはま森のようちえん「くすっこ」「つつじっこ」

吉村 尚子 氏

自然の中で直接体験する機会を、主に未就学児に提供する活動をしている。「くすっこ」は未就園児中心の親子参加型保育、「つつじっこ」はサマースクールとして、幼稚園児を預かり実施した。2018年12月からの活動であるが、参加者は延べ1000人を越えている。活動内容としては、主に山に行って遊ぶ！火を見たことがない、土の上に座ったことがない、虫を触ったことがない、棒を振り回したことがない、ないない尽くしの子どもたちに、公園で遊ぶのとは違い、何もないところから遊ぶ体験をさせたいという思いで活動している。しかし、フィールド探しが大変であり、どの山（場所）も「危ない」制約があった。多くの山を巡り、適した活動場所を発見した。

幼少期だから持っている創造力を大切にする預かり型の認可外保育施設として申請予定。仮園舎も決定しており、NPO法人化したい。今後継続していくためには、お金面をどうしていくか検討中。現在はボランティアで活動中。一人でも多くの子どもたちが、これから出会う困難に立ち向かい、個々の輝きを大切に、今生きている場所で楽しいことを見つけていける大人になってほしいと願っている。

愛媛県立三崎高等学校

三崎おこし

三崎高校せんたん部

地域の担い手不足が深刻化する中、三崎高校せんたん部が、ふるさとのバトンをつなぎ、自分たちの故郷を守りたいという思いから地域おこし活動「三崎おこし」に取り組んでいる。

○　ダルメイン世界マーマレードアワード…だいだいの実を活用したマーマレードを開発

○　よさこうマルシェ…廃校を使ったイベントの実施。他高校と協力することで、高校生同士の交流にもなっている。

○　せんたんミーティング…県内外の高校生が集まり、地域活性化フォーラムを開催。

○　こんなのあるんだ大賞…みっちゃん大福を開発し、地域のイベントで販売（全国大会大賞）。

等

伊方町の人口激減は深刻な問題となっている。高校生として、大好きなふるさとを守り、持続可能な町として、地域を愛し、町を元気に楽しくしたい思いで活動している。ふるさとの未来をつくるのは自分たち！ふるさとのバトンをしっかりと受け継ぎ、つないでいく！

＜質疑応答＞

＜高校はないが、高校生はいる！～復活！高校生サークル、復活！青年団～＞

Q　国際交流はどのような経緯で実施しているのか？

A　世界から南部町を見せたかった。治安が悪いところには、やはり行けない。南部町には国際交流協会があり、韓国ハンリム大学と交流している。そのつながりから実施し、地元にいる韓国の先生に、事前の語学研修をしてもらっている。

Q　企画・運営は一人で行っているのか？

A　高校生サークルを卒業した子たちが青年団に入り、新☆青年団「へん to つくり」をつくっている。毎月一回定例会を行い、相談や計画をしている。事務局が情報を流し、実際に企画・運営しているのは青年団。ちなみに、青年団は 19 市町村のうち、４つぐらい残っている。

Q　学校（高校）との関連性はあるのか？

A　ない。町の教育委員会がオリジナルでやっている。しかし、学校への呼び掛けはしており、熱心な学校長がいる学校は取り組みやすい。高校生同士のつながり、縦のつながりからメンバーが増えており、今後も、高校生を引き込む魅力を存分に伝えていきたい。

Q　これからさらにやりたいことがあるか？

A　今までの５年間は、町からの要望に応えてきた。今後は、「やりたいこと」が高校生から出てきたら嬉しい。高校生が主体的に企画・運営していく会にしていきたい。

Q　どうして、大下さんは、そのように「変」になったのか?（青山学院大学コミュニティ人間科学部長鈴木氏）　※「変」…この会場では、最上級の誉め言葉として使用！！

A　主事講習で鈴木先生の話を聞いてから「変」になった。南部町は、エネルギッシュな町で、「変」な教育長で、「変」なことが許されている。自分（大下氏）がやりたいことが、実践できる魅力的な町！

○　高校生サークルを実施していく上では、保護者の理解が大切である。勉強も大切だが、地域での学びも大切にして、いろいろな体験をしてほしい。しかし、きちんとした勉強も大事である。
○　当時（30～40 年前）も、高校生のボランティアサークルがあり、バス停の掃除などをしていた。非行に走りがちな青少年のパワーを地域貢献活動に向けていこう……というのが当時の考えだった。青年団があったところは、その下に高校生サークルがあった。
○　これからの大学入試は変わってきている。地域活動をしてきた子の方が、大学受験にも成功している例が多い。高校生サークルから、南部町役場に試験を受けた子がいて、とても嬉しかった。

＜にいはま森のようちえん「くすっこ」「つつじっこ」＞

○　現代のお母さんたちが、どんな目線で保育園に入れているのか不安になった。幼児期に自主性を伸ばしてあげないと育たない。社会に出た時に違う。その視点に立って、お母さんたちがやっていることはすごい。
○　家庭を大事にし、循環サイクルする中で仕事をする。家族の支えがあるからできること。活動に対して停滞期もあるが、みんなで「時がくれば」を合言葉に、やっている。待っていれば助けてもらえる。
○　自由保育について…松山市にはあるが、新居浜市にはなかった。だから、自分たちで作らないといけなかった。小さい頃から、自分で考える力を育みたい。学校教育は変えられないから、幼児教育のうちから、いろいろな生き方、考え方、道はあるよ・・・と教えてやりたい。
Q　どうして、そんなに「変」になった？（青山学院大学コミュニティ人間科学部長鈴木氏）
A　「変」を認め合える世の中にしていきたいと思っている！
○　家では社会のマナーを育てる。しつけは家庭。学校の先生に頼るのではダメ。社会の生き方も教えている。バランスの持ち方を大事にし、困った時には親同士で相談している。
○　今後は、ビジネスにしたいと思っている。コミュニティがほしい。自分の子のことだけを考えていたお母さんたちが、新居浜の子どもたちのことを考え始めている。親の視野も広がっている。
Q　お父さんの参加は？
A　週末のイベントに参加している。また、旦那さんが家事をしてくれるから、今の活動ができている。
○　「森のようちえん」を卒園した後、子どもたちが小学校でやっていけるのかが不安。
○　小さい時に様々なことを体験している子としてない子の違いは大きい。発想力やアイデアでは乏しい面がある。だからこそ、幼稚園期を小学校の準備期間と捉えてほしくない。大事な時期に様々な体験をさせたい。
○　学校で学ぶことと、生活体験で学ぶことのバランスが大切で、経験値は個々で違う。学校教育は必要であるが、現在、学校教育が肥大化している。結局学校が中心。それが変わらないといけないと思うが、現状では無理。
Q　（発表者の父に対して）このような子育てをしている娘、そして孫をどう思うか？
A　はらはらどきどきしながら、手伝いをしている。うまくいってほしいけど、心配なことも多い。（スズメバチなど）娘のために、山にもよく行った。これからも応援はしたい。孫のことも、頼もしく思っている。何もなくても遊べる孫である。

＜三崎おこし＞

Q　「だいだい」とはどんなもの？マーマレードとは、イメージがもてなかったのだが…。

Ａ　校庭に、学校に寄贈して頂いた「だいだいの木」がある。実は、すっぱくて、いつもだめにしていた。そこで、みかんのマーマレードもあるし、やってみたらという発想から生まれた。最初はまずかったが、家庭科の先生と生徒たちで試行錯誤を重ねていくうちに、おいしくなっていった。

Ｑ　「せんたん部」の名称の意味は？

Ａ　この地域が佐田岬の先端にあること、そして、これから最先端のことをやっていこうという、「先端」の意味を掛け合わせている。部員は、部活を掛け持ちしており、時間の制約がある中、活動している。

Ｑ　先輩（三崎高校せんたん部卒業生）の数は？

Ａ　一番年上が大学２回生。始まりは二人だった。今が４代目になる。

Ｑ　この活動は、高校として実施しているのか？

Ａ　週１時間の授業で、全校で取り組んでいる。いろいろな事業に分かれて実施し、それをまとめているのが、せんたん部になる。

○　明確な目的がないとダメ。同じ立場の高校生が、これだけ一生懸命取り組んでおり、その取組をもっと知らせるべきである。生徒たちだけでなく、先生たちの熱量もすごい。

○　地域学習の問題として、引き継いでいくことが難しい。３年間継続して取り組んでいるところがすごい。小・中学校は、地元とつながる活動が多いが、高校生は少ない。やったことを、どうつないでいけるか、小・中・高のつながりを大切にしていかないといけない。

Ｑ　三崎町の小・中・高の連携した取組は？

Ａ　地域と学校が結び付いている。地域をもとにしたネットワークがあり、様々な分野につながっている。それができるのが伊方町である。

○　進学校だと地域に根ざした取組が難しい。社会に出て役立つ人間を育てることが大切である。進学校の子どもたちにも、今回の発表を聞かせてあげたい。学校間での交流があるとよい。

○　地元のことが分からないと、他のことも分からない。進学校も、このような実践をやらなくてはいけない。

Ｑ　地域教育と関わるようになったのは、どんな経緯から？

Ａ　最初にもった危機感は、本校が分校かになるかも…ということ。それは嫌だった。自分の母校がなくなってほしくない。高校１年の時、大学生との活動で高齢者のために「体操づくり」をした。高齢者の方々に、喜んでもらい嬉しかった。こんな活動をもっとやっていきたいと思ったのがきっかけである。ャンスがあるので、さらに発展させていきたい。